様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３９２９
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２２９９

研究課題名（和文）近代日本における「少年小説」と、青少年文化及び国語教育との接続についての研究

研究課題名（英文）Study on the relationship between "Shounen-shosetsu", youth culture and Japanese language education in modern Japan

研究代表者
大橋　崇行（Ohashi, Takayuki）

東海学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：００７０８５９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本における「少年小説」を中心として、それらのテクストが少年文化や少年たちが受けていた教育とどのように関わるのかについて分析、考察を進めたものである。
具体的には、「少年小説」に関わる資料調査を行った。特に静岡大学附属図書館が所蔵する貸本屋資料については全点調査を行い、書誌データを公開した。また、ジェンダー研究の視点から「少年小説」と「少女小説」との差異についての分析を行ったほか、小説、マンガ、実写映画、講談など複数の表現メディアで展開するテクストを横断的に分析していく方法を試みた。
これらの成果については、5件の学会発表を行い、2件の雑誌論文、1件の図書所収論文として公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「少女小説」については、これまで、ジェンダー研究やフェミニズム批評の視点から、さまざまに論じられてきた。これに対して、「少年小説」は研究の蓄積がほとんどなかったことから、まずは基礎的な研究を進める必要があった。
特に「少年小説」は、関連する資料が散逸している場合が非常に多い。そのため本研究では、資料を今後保存していくための基礎的な作業として、書誌的な調査を行うことで資料の所在を把握し、現状の確認を行った。
また、本研究を通じて多様なメディアを横断的に分析していく研究方法を実践することで、複数のメディアを通じて同時多発的に展開する現代の日本文化について研究を行うための枠組みを示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to analyze the relationship between the texts of "Shonen Shosesu" in modern Japan and the boys' culture and their education at that time.
Specifically, I investigated materials related to "Shonen Shosesu." In particular, the library of Shizuoka University conducted a complete survey of the materials housed in the library and released the bibliographic data. In addition to analyzing the differences between "Shonen Shosesu" and " Shojyo Shosesu" from the perspective of gender studies, I also attempted to analyze text that is developed in multiple media of expression, such as novels, manga, live-action films, and kodan storytelling.
These results were presented at five academic conferences, published as two journal articles and one book article.

研究分野：日本近代文学

キーワード：少年小説　少年文化　少女小説　講談　教育　修身　書誌学　メディア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）「少女小説」の研究

日本近代文学や日本児童文学の領域では、児童期から青年期にかけての女性読者を対象とした娯楽小説である「少女小説」について、多くの研究が重ねられてきた。

たとえば、菅聡子や久米依子による研究のほか、近年では嵯峨景子、目黒強などによる論考もあり、長谷川啓・岩淵宏子・久米依子・菅聡子編『少女小説事典』（東京堂書店、2015）も刊行されている。また、その前提として、本田和子、稲垣恭子らに代表される「少女」や「女学生」の表象をめぐる社会科学からのアプローチによる研究の蓄積があった。

これらの先行研究の特徴としては、特にジェンダー研究、フェミニズム批評の観点から、小説テクストに表象された「少女」や、近代における「女学生」の誕生によって生成された読者としての「少女」について、分析、考察が行われていたことが挙げられる。

（2）「少年小説」について

一方で、同じように児童期から青年期にかけての男性読者を対象とした娯楽小説である「少年小説」については、研究が進んでいるとは言いがたい状況にあった。

『少年小説大系』（三一書房、1986～97）で代表的なテクストが読めるようになっており、高橋康雄、二上洋一などによって評論として論じられていたものの、ここで再刊されたり、言及されたりした小説群は、編者、論者によって選別されたものであり、「少年小説」のごく一部にすぎなかったことは否めない。

また、横田順彌による「少年小説」に関連する書籍に関する一連の言説は、「奇想小説」「古典ＳＦ」という観点から論じたことに特徴がある。しかし、このことでそれらがミステリ、探偵小説、冒険小説といったＳＦ以外のジャンルとどのように接続するのかという点が看過される言説状況をもたらした。

以上のことから、「少年小説」の全体像を明らかにするとともに、小説以外のメディアとの関わりについての研究をすすめること、「少年」をめぐるジェンダーについての分析を「少女」とともに行うことなどが、この領域についての研究上の課題であると考えた。

（3）メディア横断型テクストの分析

研究代表者はこれまで、一柳廣孝氏（横浜国立大学教授）と久米依子氏（日本大学教授）が立ち上げたライトノベル研究会に参加して、現代の中学生、高校生を想定読者としたエンタテインメント小説であるライトノベルについての研究を行ってきた。その中で、ライトノベルが、マンガやアニメーション、ゲームなどの様々なメディアに展開していることから、ライトノベル論、マンガ論、アニメ論のような特定のメディアの内部にあるテクストだけでなく、それらのメディアを横断的に分析する理論を確立する必要があった。

近年の文学研究、文化研究では、リンダ・ハッチオンによって示されたアダプテーションの分析理論が注目されている。これは、岩田和男、武田美保子、武田悠一らによる言及や、波戸岡景太による議論などで、国内でも様々に論じられている。小説を「原作」とするテクストが映画として映像化されたときに、映画テクストを「原作」である小説の附属物として捉えるのではなく、映画テクストそのものとして映画の枠組みから評価しようとする発想を基本とした分析理論である。

しかし、こうした研究は原作としての小説テクストと翻案（アダプテーション）としての映画テクストとの比較という単純な分析に陥りやすく、それだけでは多様なメディアで同時多発的に展開する現代のテクストに見られる諸問題を具体的に検証していくことができない。したがって、新たな研究方法を理論的に確立し、それを実践していく必要があった。

そのためには、より複雑化した現代のテクストを分析する前の段階として、明治期から昭和期にかけてのテクストを分析するための基礎的な方法を見いだし、それらをどのように現代の研究に応用していくのかという視点が必要であった。

２．研究の目的

（1）雑誌メディアを含めた「少年小説」関連書籍の調査収集を行うこと

本研究の第一の目的は、「少年小説」とその周辺にある少年文化に関わる資料の調査、収集をおこなって、実際にどのようなテクストが刊行されていたのかの全体像を明らかにすることにある。

特に、旧来の少年小説をめぐる言説においては、古書として販売されている単行本を中心として語られることが多かった。しかし、1970 年代以前のこのジャンルについては、単行本よりも雑誌メディアのほうが中心的な位置を占めていた。したがって、明治期から昭和期にかけての「少年小説」とその周辺領域に関わる単行本に加え、雑誌についても調査・収集を行うことが、本研究の目的である。

このジャンルに関わる雑誌は国立国会図書館国際子ども図書館、東京都立多摩図書館（東京マ

ガジンバンク）などでも端本としてしか所蔵がない場合が多く、すでに散逸してしまっているために、創刊から終巻までの号が揃わないことが少なくない。したがって、まずは書籍、雑誌がどこまで原典で閲覧、収集できるのかという調査を継続的に行うことで、資料を保存していくために道筋を示していく必要がある。

また、第二次世界大戦のあいだに台湾、朝鮮半島などに持ち込まれた本が少なくなかったことや、戦後、ＧＨＱ統治下に刊行され、メリーランド大学のゴードン・Ｗ・プランゲ文庫が所蔵しているこの領域に関わる資料の中に、まだ国立国会図書館でデジタル化されていないものが含まれていることにも留意する必要がある。したがって、国内だけでなく国外での所蔵状況についても調査することで、従来よりも広範な調査によって、「少年小説」に関連する資料の把握をしていく必要がある。

一方、本研究においては、特に明治期に貸本として流通していた書籍が非常に重要となる。そこで、本研究の一環として静岡大学附属図書館が所蔵する明治期貸本資料についての調査を行い、データベースとして公開することをめざした。

（2）小説以外の表現メディアと「少年小説」との関わりを明らかにすること

本研究の第二の目的は、小説の分析だけでなく、マンガ、映画、舞台、講談などの大衆文化と「少年小説」との関わりについて考えることで、複数のメディアにまたがって展開していくテクストをメディア横断的に分析、考察していくための方法論を検討することにある。

大佛次郎「鞍馬天狗」シリーズの代表作である「角兵衛獅子」が昭和 2（1927）年から翌昭和 3（1928）年にかけて雑誌『少年倶楽部』に連載されていたり、同じく 1936（昭和 11）年に『少年倶楽部』で連載が始まった江戸川乱歩「少年探偵団」シリーズの例に示されたりするように、「少年小説」は昭和期において、非常に多くの実写映画やテレビドラマ、マンガの原作となってきた。また、梶原一騎原作・川崎のぼる作画『巨人の星』（1966（昭和 41）～1971（昭和 46）年）においては、明らかに佐藤紅緑『あゝ玉杯に花うけて』（1928（昭和 3）年）がプレテクストの一つとして認められる。このように「少年小説」は、明治期以降の少年文化が編成されていくときの基盤となっていた。また、特に明治期から大正期にかけては、講談や、そこから派生した講談として上演することを前提としない「書き講談（新講談）」が、「少年小説」と非常に密接な関係にあった。したがって、小説から他の表現メディアへという一方通行の関係ではなく、多様な表現メディアが相互に引用しあいながら、次のテクストが編成されていくという過程を動態として扱い、研究を進めていく必要がある。

したがって、旧来の文学研究、マンガ研究、アニメーション研究、映画研究のように、一つの表現メディアの中だけで閉じた分析を行うのでなく、複数のメディアにまたがるコンテンツを総体として分析していくための方法論の開拓を、本研究ではめざしている。

（3）国語教育をはじめとした同時代の教育と少年文化との関係を明らかにすること

本研究で扱っている「少年小説」は基本的に娯楽小説であることから、たとえば児童文学が国語教育において多くの「教材」として国語教科書に掲載されてきたような、直接的な教育との関わりを見いだすことが難しい。

しかし、たとえば日本の児童文学の嚆矢とされてきた巌谷小波『こがね丸』（1891（明治 24）年）を見れば明らかなように、娯楽としての「少年小説」と娯楽からある程度切り離された「児童文学」との境界線は、特に明治期においてはきわめて曖昧なものである。また、「少女小説」の担い手である吉屋信子が大東亜文学者大会に参加をして戦争に加担し、あるいは「少年小説」の代表的な書き手の一人である山中峯太郎が戦争小説で人気を博していたように、これらの娯楽小説は当時の子ども達の思想の形成においてきわめて重要な契機となってきた。

また、そもそも日本の児童向け読みものの出発点が江戸期の心学道話の文体で『イソップ物語』などの西洋における童話を翻案していたものにあったことを踏まえて考えれば、本研究で扱う「少年小説」が国語や修身などの学校教育と関わりを持っていた可能性は、十分に想定することができる。

したがって本研究においては、「少年小説」とその周辺にある少年文化が、同時代の教育とどのように接続していたのかを具体的に検証していくことによって、文化と教育との関わりについて新たな視座を示すことを目的としている。

３．研究の方法

（1）資料の調査、収集

本研究の調査、収集においては、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館の「国文学文献資料調査要領（近代）」に基づき、同館の近代書誌調査用の様式を用いて実施する。このことで、書誌学の方法に基づいて資料の所蔵状況と様態、書誌などに関するデータを収集していく。

国内では国立国会図書館国際子ども図書館、東京都立多摩図書館（東京マガジンバンク）、三康図書館、大阪府立図書館国際児童文学館などを中心に、そこでの所蔵状況を明らかにしていく。また国外では、国立台湾図書館、韓国国立中央図書館に所蔵されている日本語資料のほか、メリーランド大学のゴードン・W・プランゲ文庫、ケンブリッジ大学の日本語コレクションなどでも、「少年小説」関連資料の所蔵状況、および資料の状態について調査を行う。

また、特に本研究の調査における基盤事業である静岡大学附属図書館が所蔵する貸本屋資料の調査については、資料の所蔵状況、および書誌データを公開し、研究成果を社会に還元していくこととする。

（2）言説研究の方法による資料の具体的分析

(1)の研究において調査、収集を進めたそれぞれの資料について、言説研究の方法によって分析を進める。その際、分析対象とするテクストを具体的に一つ選定した上で、そのテクストに見られる諸問題がどのように編成されたのかを、同時代の多様な言説から検証していく。このことで、小説テクストの中にマンガや映画、実写映画、講談といった同時代の物語がどのように組み込まれていたのか、また、小説以外のテクストを中心に据えた場合はどうかなどの視点から分析を行っていく。

また、物語を語る表現メディアどうしでの関係性だけでなく、教育に関わる言説とそこで編成された価値観が物語の内容や語りにどのように含まれているのかを考えていくことを通じて、教育との関係性についても考察することが可能になる。このような言説研究の方法によって多様な視点から実証的に分析していくことで、アダプテーションの理論を用いて進められている現代の研究動向とは異なる、新しいメディア横断型テクストの分析方法の理論化、および実践をめざす。

４．研究成果

（1）「少女小説」と「少年小説」との差異についての研究

本研究において前提となる「少年小説」がどのような小説群であるのかを規定するために、先行研究において言及されることが多かった「少女小説」を基本とし、それらのテクストと「少年小説」とがどのように異なっているのかという視点から分析を行った。

具体的には、西条八十の小説「魔境の二少女」『少女の友』(1952 年 8 月（第 45 巻第 8 号）～1953 年 10 月（第 46 巻第 10 号））と、「湖底の大魔神」（『東光少年』1950 年 2 月（第 2 巻第 2 号）～5 月（第 2 巻第 5 号）との比較を行っている。この二つは、同じ物語を持ったテクストであるが、「少女小説」を掲載していた代表的な雑誌である『少女の友』と、「少年小説」を掲載していた雑誌である『東光少年』とで少女向け、少年向けと読者層に合わせて書き分けて発表されたという経緯をたどっており、そこに示される差異が、「少女小説」と「少年小説」との差異を考えていく上での一つのケーススタディになると考えたためである。

この研究については、論文「少女たちの冒険と探偵　西條八十『魔境の二少女』」（『Juncture』第 10 集、2019.3）にまとめた上で、広島大学での招待講演、および東海学園大学言語文化学会での口頭発表を行っている。その中で、特に「少女小説」ではミステリ構造が小説の中心になるのに対し、「少年小説」では主人公となる少年の冒険が中心になる形で明確に書き分けられていることを指摘した。

こうした研究成果を踏まえ、論文「闇野冥火の少女小説―「闇に光る眼」の位置づけとその問題点―」（伊藤鉄也編『もっと知りたい　池田亀鑑と「源氏物語」　第 4 集』、新典社、2021）では、西條八十による小説以外のテクストにおいても、同様の傾向が指摘できることを論じた。また、池田亀鑑の小説においては、ミステリとしての構造に加えてホラー小説、怪奇小説としての要素が取り込まれる問題について分析を行っている。

（2）少年文化と「少年小説」との接続についての研究、複数の表現メディアにまたがるテクストの横断的分析方法の開拓

明治期から昭和期にかけて「少年小説」の読者たちがどのような文化を持ち、それらがそれぞれの時代ごとに「少年小説」とどのような関係性のもとにあるのかという問題について分析を行った。またその中で、本研究の目的の一つである、複数の表現メディアにまたがるテクストを横断的に分析していく研究方法を試み、口頭発表などにおいて実践した。

具体的には、久米依子氏（日本大学教授）、山中智省氏（目白大学講師）とともにパネル発表「現代日本文化における若者と多様性（Youth and Diversity in Modern Japanese Culture）」を行った（Japanese Studies Association of Australia Biennial Conference (JSAA 2019)）。また、2019 年度のシンポジウム「時代劇メディアと「ポップ・カルチャー」の境界を歩く」（第 11 回 時代考証学会シンポジウム　2019.11.30）にディスカッサントとして登壇し、宮本武蔵を扱った講談や小説、マンガと、明治期の少年文化において編成された歴史をめぐる言説との関わりについてコメントした。この他、学術論文 1 編を執筆、投稿し、現在、査読中である。

（3）「少年小説」と教育との関わりについて

「少年小説」の読者だった「少年」たちが受けていた教育や、それらをめぐる言説と、「少年小説」との関わりについての研究では、特に国語教育や作文教育、修身との関わりについて研究を行った。

口頭発表「文豪・森鴎外、電話に出ない！　「文豪」言説における作家の消費と「文学の俗性」」（日本近代文学会平成 30 年度秋季大会、2018.10.27）において、少年雑誌において「文豪」がどのように扱われていたのか、それらが現代のゲームやマンガ、小説で編成されているキャラクターとしての「文豪」とどのような差異、共通性を持っているのかに分析を行った。具体的には、

少年たちが自身の作文した文書を投稿する投稿雑誌において見られる言説に着目し、少年たちにとって教育を受けた結果としての「書く」ことをめぐる営為や、それらを取り巻く文化について考察したものである。

また、査読論文「「愛国」に覆われる世界　道徳教育としての「少年講談」」（『昭和文学研究』第 79 集、2019.10）では、明治期から大正期にかけて「少年小説」と密接に関わりのあった講談において、それが同時代の修身教育とそこでの「愛国」をめぐるナショナリズムの言説とどのように関わっていたのかという問題を具体的に明らかにした。

（4）「少年小説」関連資料の調査・収集、および再刊本の刊行

本研究では、国内外の図書館等に所蔵されている「少年小説」関連資料の調査を行い、複写資料やデジタル画像資料として収集を行った。

具体的には、国内では国立国会図書館国際子ども図書館、東京都立多摩図書館（東京マガジンバンク）、三康図書館、大阪府立図書館国際児童文学館、国外では国立台湾図書館、韓国国立中央図書館に所蔵されている日本語資料のほか、メリーランド大学のゴードン・W・プランゲ文庫、ケンブリッジ大学の日本語コレクションにおいて所蔵資料の中から「少年小説」に関わるものを抽出し、原本調査を行った。また、静岡大学附属図書館貸本屋資料群については、国文学文献資料調査要領に従って、FileMaker を用いて全 309 点の書籍に関する書誌情報のデータベース化を完了し、国文学研究資料館にデータを提供して、同館がＨＰ上において公開している「近代書誌・近代画像データベース」（https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/）でデータの公開を行った。

〈引用文献〉

① 菅聡子編『〈少女小説〉ワンダーランド　明治から平成まで』、明治書院、2008、1-173
② 久米依子『「少女小説」の生成　ジェンダー・ポリティクスの世紀』、青弓社、2013、1-356
③ 嵯峨景子『コバルト文庫で辿る少女小説変遷史』、彩流社、2016、1-296
④ 目黒強「明治後期における『少女世界』にみる良妻賢母規範をめぐるポリティクス　〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を事例として」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 11 巻第 1 号、2017-09、95-104。「メディア有害論からみた『少女世界』における女学生像　「少女小説」と「演劇」を中心として」、『国際児童文学館紀要』第 26 号、2013、1-14
⑤ 本田和子『少女論』、青弓社、1988、1-242。『女学生の系譜　彩色される明治』、青土社、1990、1-260。
⑥ 稲垣恭子『女学校と女学生　教養・たしなみ・モダン文化』、中央公論新社、2007、1-246
⑦ 高橋康雄『少年小説の世界』、角川書店、1986、1-340
⑧ 二上洋一編『少年小説の世界』、沖積社、1991、1-133
⑨ 横田順彌『日本 SF 古典こてん』、早川書房、1980、1-442
⑩ リンダ・ハッチオン、片渕悦久ほか訳『アダプテーションの理論』、晃洋書房、2012、1-275。原書は Linda Hutcheon, *A Theory of Adaptation*, Routledge, 2006
⑪ 岩田和男、武田美保子、武田悠一編『アダプテーションとは何か』、世織書房、2017、1-320
⑫ 波戸岡景太『映画原作派のためのアダプテーション入門　フィッツジェラルドからピンチョンまで』、彩流社、2017、1-213

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 大橋崇行	４．巻 79
２．論文標題 「愛国」に覆われる世界　道徳教育としての「少年講談」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 昭和文学研究	６．最初と最後の頁 42-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大橋崇行	４．巻 10
２．論文標題 少女たちの冒険と探偵　西條八十「魔境の二少女」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 JunCture　超域的日本文化研究	６．最初と最後の頁 34-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/juncture.10.34.	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 大橋崇行、久米依子、山中智省
２．発表標題 現代日本文化における若者と多様性
３．学会等名 豪州日本文化学会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大橋崇行
２．発表標題 冒険し戦うヒロインの生成と展開　西條八十『魔境の二少女』を中心に
３．学会等名 東海学園大学日本文化学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 尼子騒兵衛，玉井建也，花岡敬太郎，茂木謙之介，大橋崇行
２．発表標題 時代劇メディアと「ポップ・カルチャー」の境界を歩く
３．学会等名 時代考証学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大橋崇行
２．発表標題 文豪・森鴎外、電話に出ない！ 「文豪」言説における作家の消費と「文学の俗性」
３．学会等名 日本近代文学会平成30年度秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 冒険し、戦うヒロインの生成と展開
２．発表標題 大橋崇行
３．学会等名 広島大学（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 芦辺拓編、大橋崇行校訂	４．発行年 2018年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 603
３．書名 少年少女奇想ミステリ王国第１巻　西條八十集	

１．著者名 伊藤鉄也編	４．発行年 2021年
２．出版社 新典社	５．総ページ数 370
３．書名 もっと知りたい　池田亀鑑と「源氏物語」　第4集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」
http://base1.nijl.ac.jp/~kindai/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関